

35

華岡青洲の「瘍科方笈」は 「瘍科瑣言」に準拠して成立したのか

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

1923年の呉による青洲の事績に関する本格的研究が始まって100年にならんとし、この間青洲に関する多くの著書が出版され、また夥しい数の研究論文が発表されてきた。それにも拘わらず、青洲に関しては依然として多くのことが未解決のまま残されている。重要な課題の一つは著述の成立年代の確定である。青洲の医学思想がどのように萌芽し、どのように発展し成熟したかを解明する上で彼の著作は非常に重要であり、とくにそれらの成立年の確定は、青洲の思想の成長過程を論ずるために不可欠である。著者はこれまでに「瘍科神書」、「瘍科瑣言」、「産科瑣言」、「乳岩辨」、「乳岩準」、「乳岩準附録」、「青洲医談」、「丸散弁覧」、「禁方(拾)録」、「続禁方録」、「青囊秘録」、「奇方記聞」、「膏方便覧」についての論考を発表してきた。今回、これまで詳しく知られていなかった「瘍科方笈」の成立とその内容に関して42本の写本を調査して新知見を得たので報告する。

1980年に「近世漢方医学書集成30」の「華岡青洲 二」に大塚敬節所蔵の「瘍科方笈」が覆刻収載されることになった。宗田一が解題を担当したが、『「瘍科瑣言」中の薬方を収録したもので、両書は対をなす。多くの創方がみえる。』と記して「瘍科方笈」は「瘍科瑣言」と対をなすとしたが、両書の書名間には密接な関係性が認められない。「瘍科瑣言」の処方を集めた書であれば、「瘍科瑣言方笈」あるいは「瘍科瑣言処方便覧」などと直ちに「瘍科瑣言」を想起させる書名でなければならない。「瘍科瑣言」は外科疾患を対象とする性格上、時代を経てもその内容が進歩し変化することが少なかった。一方、「瘍科方笈」は処方集という性格のため時代と共に使用される新しい処方が付加されて、収載処方数が増加した。例えば本問玄調の編集した「春林軒二十一種」の「瘍科方笈」(以下「二十一種本」)の処方数は359方で、同じく「春林軒二十一種」の「瘍科瑣言」の処方数約500方と大きく乖離している。この差は「瘍科方笈」が「瘍科瑣言」に準拠して成立したのではないことを示す。

「瘍科方笈」が「瘍科瑣言」に準拠して成立したものであるとすれば、記載疾患名、その記載順序もほぼ一致しなければならない。ところがいずれも両者で一致しない。「瘍科方笈」がいつ成立したかについては正確には不詳である。編者も不詳である。1808年末までに書写された「瘍科瑣言」の写本中に「瘍科方笈」の書名が披見されるので、その頃までには初期の写本が成立していたことは間違いない。調査した42本について冒頭からの5疾患を指標にすると10群に分類され、第2番目の疾患が「梅毒(楊梅)・結毒」となっている群が処方数も少なく初期の形態を保っていると考えられる。処方数の多い写本ほど後年に成立した傾向にあるからである。一部の疾患に「附録」の処方が追加されている写本がある。「附録」をだれが、いつ付したかは知られていない。安田孝平が「増補」の業を行ったことは佐藤持敬の「華岡氏遺書目録」で明らかであるが、このことを併せ考えると、彼が「附録」を付けた可能性が高い。「二十一種本」で青洲の創方と明記されているのは「癰疽」の項の「十味敗毒散」と「飯飯建中湯」、「乳疾」の項の「仙方散聚湯」と「消結飲」の4方のみである。42本の「瘍科方笈」のいずれにも麻沸散(湯)の名や処方内容は披見されない。もちろん「通仙散」の名前もない外科疾患に対して投与する処方でない麻沸散(湯)の名を欠くのも当然であろう。麻沸散(湯)は全身麻酔を行うために投与する薬であって、疾病に対する薬剤ではないからである。書写年の明らかな「瘍科瑣言」と「瘍科方笈」を比較することによって春林軒における外科疾患の薬物治療の変遷を明らかにすることが出来るので、1830年以前に書写された両書の写本の発見が急務である。